

私を感動させた1冊

「軽蔑」モラヴィア著



シネマ・エッセイスト高野てるみさん

映画配給のバリ映画代表取締役・プロデューサーでシネマ・エッセイストの高野てるみさんが推す1冊は「軽蔑」。ブリジット・バルドー主演の同名の映画があるイタリアの作家モラヴィアの長編小説だ。

物語は劇作家のリッカルドが気の進まぬ映画のシナリオの仕事をもたらるのが発端。仕事をくれたのが敏腕プロデューサー。この男がくせ者でリッカルドの美貌の妻エミリアに目をつける。無力な夫は妻だけをプロデューサーの車に同乗させる。ただ、いきなり情事

『ベベ』でなければ演じられなかった

ゴダール風になつていま、デューサーに売ったと感じます。原作は夫がくじけじつたから。それが夫への「軽蔑」になる。

エミリアがプロデューサーの車に同乗する場面を、高野さんは「わかっていながら妻を同乗させた。さらわれるようなものだ。どうなつてもいいということ。しかも相手は好きでも

高野さんの最新の著書に「ブリジット・バルドー」女を極める60の言葉(PH P文庫)があるが、その映画「軽蔑」についての項目で、エミリアを演じたブリジット・バルドー(BB)がプロデューサー役の俳優を「猿のような顔」と評したとある。ベベらしい奔放な発言だ。

「映画は原作とちがって、事欲しさに夫が自分をプロ

妻が冷たくなるのは、仕方ない」とし、妻の怒りを理解する。

著者はコキユ(間男)された。の経験がある。著者の最初の妻は映画界の巨匠ヴィスコンティと愛人関係にあった。エミリアが最後に自動車事故で死ぬのは、著者の妻への「怨念」だと訳者(大久保昭男)の解説にある。

同書にはカリスマ女優の魅力が余す所なく描かれていたのがよかった」と高野紙力バーには「恋をしてい



のである。もちろんこの考え方は私の独断と偏見ではない。国民作家司馬遼太郎は晩年につづった歴史エッセー集「この国のかたち」で朱子学の代表的な概念(つまりべき、王は尊ぶべし、という思想が成立した。つま



ないとき、私は醜くなるの言葉。高野さんは「恋と愛がもたらす刺激が女を美しくするという意味です」と話す。他に、「私には一人で寝ることなど、考えることすらできない」は「ヨーロッパではカッパル社会が当たり前の前提があるから」。

北条執権と元寇

井沢元彦



日本人はどう対外戦争を乗り切ったか。前回までに述べたような。ただの夫も、奪われた妻子

『ブラックアウト』 著杉 列著

『相続に困ったら最初に読』 著相 申子著

ビジネス